

夕張岳産の隔離分布種について(1)

刈谷市 野坂 志朗

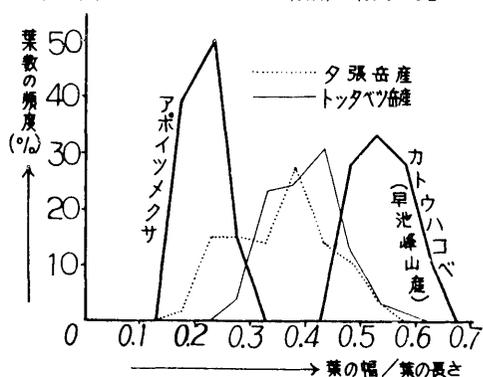
夕張岳からは、現在までに、536種1亜種10変種11品種の種子植物が記録されているが、それらのうちで、国内において著しい隔離分布を示すものがいくつかあります。今回は、夕張岳産の隔離分布種について、分類及び分布の概要等を紹介いたします。

1 カトウハコベ (*Arenaria katoana* MAKINO) 岩手県早池峰山産の標本に基づき、1905年、牧野富太郎博士により記載発表された日本固有種である。種小名の *katoana* は、牧野博士の後援者であり、山草愛好家でもあった加藤泰明子爵に献名された。今日までに、早池峰山のほか、群馬県谷川岳、至佛山、北海道では夕張岳、トッタベツ岳、チロロ岳、キリギシ山、富良野西岳等の産が知られている。低山域では、穂別坊主山の蛇紋岩崩壊地にも産する。これらの産地は、キリギシ山が石灰岩の岩塔であるほかは蛇紋岩かカンラン岩の山で、本種が超塩基性岩特生植物であることを示している。国内産の *Arenaria* 属のものには近縁種が知られていないので、恐らく、極東寒帯域に分布する同属の或る種のものとは共通起源のもので、超塩基性岩（稀に石灰岩）地域に後氷期残存し、北方域の種とは異った分化をしたものと思われるが、明瞭な近縁種は不明である。

1928年、館脇操博士は、アポイ岳産のものを狭葉の変種 *V. lanceolata* TAKEWAKI (アポイツメクサ) として区別した。早池峰

山のカトウハコベは、葉の幅／葉の長さの比が平均0.53(0.45~0.65)、アポイ岳産のもの比は平均0.20(0.15~0.29)である。夕張岳とトッタベツ岳のものは、概して両者の中間型である。これらの関係は第1図に示すとおりである。

第1図 カトウハコベの葉幅／葉長 比



詳細については、本誌の前身の「えぞやまはな」12号所載の拙文を御参照下さい。

高山帯産のものは、花序が単生ないし貧弱な集散花序で、1茎1~2花で3花をつけるものは稀なのに対し、穂別坊主山のものは、全体やや大形で集散花序もやや発達し、1茎あたり3個以上の花をつけるものがかなり多い。

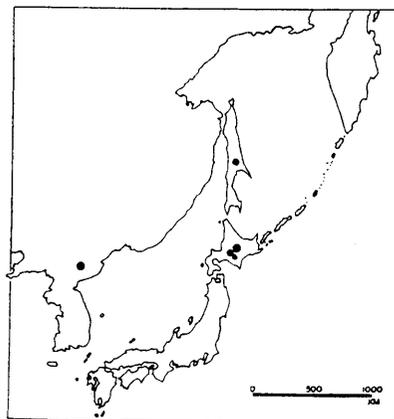
2 ナンブイヌナズナ (*Draba japonica* MAXIMOWICZ) ソビエトのマキシモウィッチにより、須川長之助氏採集の早池峰山産の標本に基づいて1876年記載発表された日本固有種である。 *Draba* 属で黄花の日本在来種は、他に北海道から九州まで低地産

のイヌナズナ (*D. nemorosa* L.) があるのみで、極東地域全体を通じてナンブイヌナズナの近縁種は知られていない。花時5~10cmで1茎当たり10個足らずの小黄色花をつけるこの可憐な植物の起源は謎に包まれている。グリーンランドから北米ロッキー山脈にかけて分布する *D. aurea* VAHL や、北米東部アパラチア山脈沿いに分布する *D. ramossissima* DESV. が近縁と言われるが、前者は果実に密毛があり、後者の果実も密とはいえないが有毛であって、両者とも花時には10~30cmの高さとなり、1茎に15~20花、時により多数花をつけるので、はるかに小型で少数花、しかも果実が無毛のナンブイヌナズナとは異なっている。なお、*D. ramossissima* の葉は概して鋸歯がない。カトウハコベと同様に氷期からの遺存種で、わが国の超塩基性岩高山に残存し特殊な分化を遂げたものと思われる。

3 クモマユキノシタ (*Saxifraga laciniata* NAKAI et TAKEDA) 中井猛之進博士が北朝鮮白頭山産の標本に基づいて1941年に、一方、武田久吉博士が夕張岳産と大雪山産の標本に基づいて1915年に、それぞれ連名で記載発表したものである。周極分布する *S. stellaris* L. に極めて近く、北朝鮮のものは、既に1880年に *S. stellaris* として JAMES が記録していた。*S. stellaris* は、花卉基部が急に細まって柄に続き、葯は白~淡紫色、時に紫色であるのに対して、クモマユキノシタの花卉基部は心脚で耳状に突出して柄につながり、葯は暗赤色である。クモマユキノシタは疑いもなく *S. stellaris* と同起源の種であるが、国内では、

大雪山各所の高山荒原、夕張岳の蛇紋岩小礫地及びチロロ岳のカンラン岩荒原などの限られた立地の疎群落構成員として残存したものであろう。第2図は、クモマユキノシタの分布を示したものであるが、分類上の詳細については、本誌創刊号所載の拙文を御参照下さい。

第2図 クモマユキノシタの分布



クモマユキノシタのように、日本海をめぐって、樺太~北海道(利尻・礼文、大雪山、夕張・日高山脈)~本州高山~北朝鮮高山、という分布型を示すものに、ヒダカソウとその近縁種すなわちカラフトミヤマイチゲ(樺太)~ヒダカソウ(アポイ岳・夕張山脈の一部)~キタダケソウ(北岳)~ウメザキサパノオ(北朝鮮)の例もあるが、このような分布は、大陸と陸続きであった頃の古地理を思わせるものとして興味深い。

4 ハゴロモグサ (*Alchemilla japonica* NAKAI et HARA) 本種は、はじめ、牧野富太郎博士が、白馬岳産の標本によってヨーロッパの *A. vulgaris* L. に当てて、ハゴロモグサの和名(英名 lady's mantle) を

付して1902年に日本新産を報告したものである。第3図は、ヨーロッパの路傍の雑草 *A. vulgaris* の1型を示したもので、ハッチンソン（1955年）による。

第3図 *Alchemilla vulgaris* L.

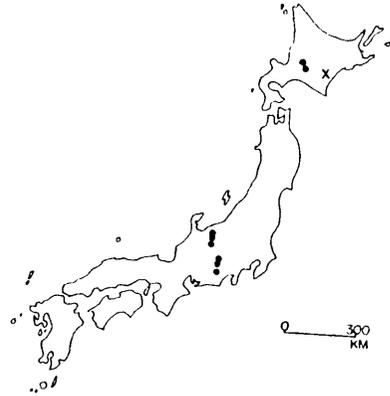


爾米、八ヶ岳、北岳、荒川岳、赤石岳等日本アルプスの諸山の産が報告され、北海道では夕張岳の産が原寛博士によって1937年公表された。原博士は、ハゴロモグサがヨーロッパの *A. vulgaris* 群のうちで細分すると *A. filicaulis* BUSER に最も近いが、葉がより多毛で葉の切れこみが極めて浅い別種であるとし、中井猛之進博士と連名で上記の学名を与え、1937年に記載発表したものである。夕張岳では、前述の3種が蛇紋岩崩壊地に生じているのに対し、本種は、本峰尾根の一部とガマ岩附近のみに生じ、蛇紋岩との著しい関係が見られない。

長らく北海道における産地は夕張岳のみであったが、渡辺定元・佐藤謙両氏によって、1971年にキリギシ山の産が報告された。

第4図は、現在までに知られている本種の分布を示すものであるが、×印は十勝上更別である。

第4図 ハゴロモグサの分布



ヨーロッパからアジア北部にかけて広く雑草として分布する *Alchemilla vulgaris* に近い種で、わが国に自生する *Alchemilla* 属唯一の種であるが、後氷期に残存したものが一部の高山で日本固有種となったものと思われる。ところで、1983年8月に、沖縄県立教育センターの佐久本敏氏が、十勝上更別のヤチカンバ林附近で本種と見られる植物1個体を採集した。この標本は、多少やせ形でやや毛が少いが、ハゴロモグサと認定できるものである。その後、ヤチカンバ (*Betula ovalifolia* RUPRECHT = *B. tatewakii* OHKI et S. WATANABE) 林附近では見つけられていないが、もし本種が上更別をはじめヤチカンバ林に伴って残存しているものならば、ヤチカンバの故郷である満州東・北部、アムール、ウスリー地方の植生（ヤチカンバ＝ヒメオノオレを含む植生）の精査が必要で、その結果ハゴロモグサの由来が解明できるかもしれない。

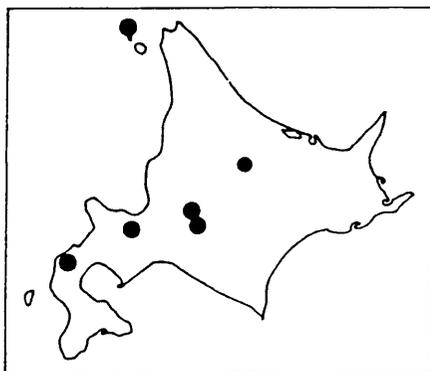
い。花期でも目立たぬ色彩の多年草なので、今後産地が増加する可能性もある。

5 ウラジロキンバイ (*Potentilla nivea* L.) 典型的周極分布種であり、わが国では、本州中部の戸隠山及び北アルプス北半と南アルプスの諸山に知られるが、関東以北の高山には見られず、北海道では礼文島・天塩岳・キリギシ山・夕張岳・定山溪天狗岳・大平山に産する。明らかに氷期以来の遺存植物である。

夕張岳ではガマ岩の岩棚やテブリの間に生じ、稀品である。夕張岳のものは、小葉がやや大型で毛が少なく、鋸歯が粗大であることから、変種エゾウラジロキンバイ (*V. yuparensis* MIYABE et TATEWAKI) として1939年に記載発表されたが、母種との間に判然とした区別を設定することは困難である。定山溪天狗岳のものもエゾウラジロキンバイ型とされており、キリギシ山のものも中間型のようなものである。

本種の北海道における分布は第5図のようになる。

第5図 ウラジロキンバイの北海道における分布



6 リシリゲンゲ (*Oxytropis campestris* DC ssp. *rishiriensis* TOYOKUNI)

広く周極分布をする *O. campestris* に極めて近いもので、はじめ松村任三博士により利尻岳産の標本に基づいて1901年に *Oxytropis risiriensis* MATSUMURA として発表された。*O. campestris* とは、葉裏が無毛で果実も無毛であることで区別され、別種とされたものである。ヨーロッパに本拠を持つ *O. campestris* は、かなり変異の幅が広いので、リシリゲンゲを *O. campestris* そのものと見る扱い方 (館脇操博士、1934年。ほか) もある。その扱いをするなら、氷期の名残りの1種が、僅かに利尻岳・夕張岳及びニベソツ山の三か所に遺存しているということになる。

豊国秀夫博士は、リシリゲンゲを *O. campestris* の北海道亜種とみなし、標記の学名を1975年に提示した。清水建美博士も同様の考え方で、変種とする扱いを公表している。

夕張岳では、ガマ岩に産する。

次回は、ホソバウキミクリやタカネヒメスゲ等の目立たぬ姿の隔離分布種について紹介します。